

# 相生の吹筒煙火

民俗班（徳島民俗学会） 高橋 晋 一<sup>1)</sup>

## 1. 吹筒煙火の歴史

阿波では藩政期より、村の祭礼や各種催事の余興として、吹筒煙火（吹筒花火）<sup>1)</sup>が盛んに行われてきた。しかし現在、県内でこの吹筒煙火の技術を伝えているのは、相生町を中心とした丹生谷地方、および小松島市立江町に限られている。同地の吹筒煙火は、三河の手筒花火と並び、花火の原初形態を伝える貴重な民俗文化と言える。

相生の吹筒煙火がいつ頃創始されたものかは定かでない。しかし、「花火調合」と題された天保4（1833）年の意匠（延野村若連中、天保四年巳ノ九月改）が残されていることから、少なくともこの頃には当地で煙火が作られていたことがわかる。

## 2. 煙火の製造法

煙火の製造は、戦前までは各煙火組（後述）により、氏神の舞台や山小屋などで行われていた。しかし戦後火薬の取り締まりが厳しくなると、小松島市の花火工場まで出かけて行って作るようになった。現在は字谷内の花火製造所（平成9年完成）で製造している。

吹筒煙火の製造工程は、以下の5段階からなっている。

### 1) 火薬原料の調達

火薬の原料は、硝石・硫黄・木炭灰の3つである。戦前は、硝石や硫黄は山から取ってきて、自分たちで摺って粉にしていたが、昭和30年頃から粉碎したものを業者から購入するようになった。木炭灰も現在は業者から購入しているが、以前は自分の組で焼いていた。今でも競技会の際には、自分たちで杉材を焼いて木炭灰を作る煙火組もある。

### 2) 火薬の調合

1本の煙火は、原料の調合の割合の異なっていくつかの段（通常3～7段）からなる。各煙火組に伝わる「意匠」には、各段（一番、二番、三番などと称する）の原料の配合比が具体的に記されている。

意匠の指示に従い、各段ごとに硝石・硫黄・木炭灰を計量し、摺り合わせる。昔は計量にレングと呼ばれる竿秤さおばかりを用いた。調合が終わると、出来具合を調べるため、燃焼試験をする。

### 3) 鉄粉の配合

火花となる鉄粉は、戦前まで鉄くわの先など、手近にある鋳物を金槌で叩いて作っていた。

1) 徳島大学総合科学部

できた鉄粉は「けんど」と呼ばれる<sup>ふるい</sup>篩を使い、一号～五号（号数は鉄粉の粗さを示す。号数が増えるほど粗い）まで選別された。各号の鉄粉の配合比は、煙火組の秘伝となっている。鉄粉は、昭和30年頃から業者から購入するようになった。そのため規格が統一され、火花の開き具合が均質化したという<sup>(2)</sup>。

#### 4) 揉み合わせ

続いて、摺り上がった黒色火薬（硝石・硫黄・木炭灰）に、火花となる鉄粉を混ぜ合わせる。

#### 5) 筒込み

揉み合わせが終わると、火薬を筒に込めていく。筒（写真1）には木筒（松）と竹筒があるが、現在はもっぱら竹筒が使われている。火薬は、「一番」から順に筒に込めていく。かつては、火薬を筒に入れる「入れ役」、



写真1 吹筒煙火の竹筒



写真2 筒込みの作業

込み棒で火薬をならす「込み方」、込み棒を槌で打つ「槌方」に分かれ、協力して作業を行ったが、今は一人で何役もこなすことが多い（写真2）。槌打ちの力の入れ加減など、筒込みの技術は長年の経験から覚えていった。

### 3. 煙火組と競技会

煙火を製造し、打ち上げるグループを「煙火組」と呼ぶ。戦前までは、煙火組は町内の各地区にあったが、戦後、その数は次第に減少してきている。

現在、相生町内で活動している煙火組は、以下の12組である。

平野	桜組、新桜組、天酔連、光栄団、あじさい連		
谷内	八坂組	鮎川	都連
牛輪	松組、娯茶平組	段所	段柳組
下雄	龍王組	大久保	上組

各煙火組には、煙火の火薬原料（硝石・硫黄・木炭灰・鉄粉）の配合率を記した「意匠」と呼ばれる秘伝書が伝えられている（写真3）。意匠は極秘扱いとされ、かつては組の長老（頭領）が厳重に保管していた。意匠によって、煙火の噴出する様子に変化する。煙火がどれだけ意匠の意図する通りに作れるかが伝統の技術であるという。

煙火を上げる機会としては、各地区の氏神（コミヤ）の秋祭り（コマツリ）の時に神前で奉納される奉納煙火と、多くの煙火組が一同に会して行われる「競技会（寄せ）」とがあった。

秋祭りの奉納煙火は、その地区の組から出品された。他の地区の組に声をかけ出品してもらうこともあったが、競技会のような競争はしなかった。戦後、煙火組の消滅、経済的理由などからコマツリでの奉納煙火は次第に行われなくなり、現在町内では、朴野の龍王神社祭礼（11月22日）で相生町吹筒煙火保存会の手により4、5本が奉納されているのみである。

煙火組がそれぞれの力量を試す（誇示する）晴れ舞台が「競技会」である。競技会は、地区の大きな神社の秋祭り（奉納煙火）や、各種祝賀行事（学校や警察署の落成記念、町制25周年記念など）に合わせて開かれていた。多い年には4、5回競技会を開いたこともあった。

競技会には、相生町・鷺敷町・日和佐町（赤松）・阿南市（新野）・小松島市（立江町）など、丹生谷一带から数十組の煙火組が参加した（写真4）。審査によって一等以下の入賞チームが決められ、賞金（もしくは賞品）が出たが、各煙火組にとっては、賞金よりも、一等となる名誉の方が大事であった。

吹筒煙火は、大正から昭和初期にかけて最盛期を迎えたという。以下、当時の競技会の様子を、主に『相生の民俗』により簡単に紹介する。

競技会当日、各煙火組の組員は、揃いのハッピーに身を包み、吹筒煙火を大八車に載せ、組名を書いた高張提灯を先頭にして、伊勢節を歌いながら威勢良く会場に練り込んできた。

会場の一角には審査席が設けられたが、審査席の下には各組の打ち上げ順を記した角行灯が吊され、競技が終わると、順に行灯の中のロウソクの火が消されていった。

競技の順番が来ると、大太鼓が鳴らされ、組名が高らかに告げられた。寄付者の氏名が読み上げられると、導火線に点火される。煙火は、初めは穏やかに火を吹き上げてい



写真3 「意匠」の一例

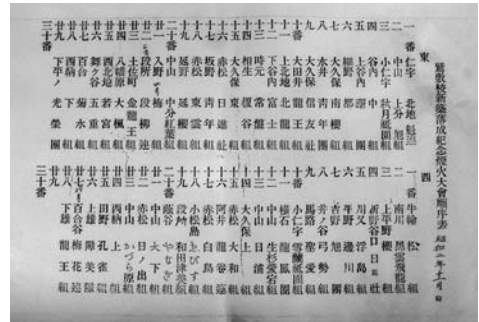


写真4 鷺敷校新築落成記念煙火大会順序表（昭和2年11月）



写真5 吹筒煙火

るが、次第に勢いよく火花を夜空に開くようになり（写真5）、最後に轟音を立てながら火柱を吹き上げる。点火中、組員は提灯を掲げ、拍子木を打ち鳴らしながら火の粉の下に飛び込んでいき、氣勢を上げて走り回った。すべての煙火が終わると、成績発表となった。

#### 4. 保存会（同好会）の結成と相生花火の現在

煙火は戦時中一時中断していたが、戦後まもなく秋祭りなどに復活した。しかし、火薬取締りの強化、娯楽の多様化などの要因により、次第に衰退の方向に向かっていった。

昭和31年、相生町・鶯敷町・日和佐町（赤松）・小松島市（立江町）の4市町の煙火関係者により「丹生谷吹筒煙火同好会」が結成され、同年より、ほぼ定期的に合同で競技会を開催するようになった（表1）。しかし、次第に開催のペースが落ち、競技会は昭和61年（第33回）に一時休止のやむなきに至った。

しかし、平成9年に「相生町吹筒煙火保存会」（中田一男会長）が結成され、同年9月

表1 丹生谷煙火同好会 煙火競技大会の記録

回数	開催年月日	優勝	主催者	場所	記念大会
1	1956/11/15	平野 桜組	丹生谷煙火同好会	阿井 八幡神社	
2	1957/10/8	蔭谷 柳組	丹生谷煙火同好会	赤松 赤松神社	
3	1957/10/9	百合谷 梅花連	丹生谷煙火同好会	鶯敷 蛭子神社	
4	1957/11/3	蔭谷 牡丹桜組	丹生谷煙火同好会	延野 王子神社	相生町合併一周年記念
5	1958/11/27	延野 王子連	丹生谷煙火同好会	鮎川 大宮八幡神社	
6	1959/9/10	蔭谷 柳組	平谷商工会	平谷中学校校庭	
7	1959/10/11	蔭谷 林業岡田組	西納 八面神社氏子	西納 八面神社	
8	1959/11/10	延野 中原組	延野商工会	延野 王子神社	
9	1960/10/1	新野 中山紅葉組	丹生谷煙火同好会	鮎川 八幡神社	
10	1960/10/12	蔭谷 林業岡田組	谷内 蔭宮神社氏子中	谷内 蔭宮神社	
11	1960/11/13	延野駅 若桜組	蔭谷村中	蔭谷 氏神社下田	蔭谷農道開通記念
12	1961/8/26	蔭谷 林業岡田組	仁宇口商工会	仁宇 八幡神社	
13	1961/10/1	大久保 桜組	吉野 吉野神社氏子	吉野 吉野神社	
14	記録不明				
15	1961/10/7	延野 王子連	大久保村氏子中	大久保 蛭子神社	
16	1961/11/23	大久保 桜組	延野商工会	延野 王子神社	
17	1962/10/3	延野 郵便局	鮎川 大宮神社氏子中	鮎川 大宮神社	
18	1963/7/17	西在 蛭子組	丹生谷煙火同好会	鶯敷小学校校庭	鶯敷町役場新庁舎落成記念
19	1964/11/10	蔭谷 岡田組	延野商工会	延野 王子神社	
20	1968/11/4	牛輪 松尾組	延野商工会	延野 王子神社	明治百年記念
21	1969/10/9	下雄 龍王組	延野 王子神社氏子	延野 王子神社	
22	1969/10/16	大久保 桜組	鮎川 八幡神社氏子	鮎川 大宮神社	
23	1970/1/29	蔭谷 牡丹桜組	赤松 赤松神社氏子	赤松 赤松神社	
24	1973/11/10	牛輪 松組	丹生谷煙火同好会	延野 王子神社	
25	1974/10/10	牛輪 松組	平野 辺川神社氏子	平野 辺川神社	
26	1974/11/30	大久保 桜組	仁宇口商工会	阿井小学校校庭	阿井小学校創立百周年記念
27	1975/4/14	牛輪 松組	丹生谷煙火同好会	延野 王子神社	
28	1975/9/15	牛輪 娯茶平組	平野小学校PTA	平野小学校校庭	平野小学校創立百周年記念
29	1976/10/9	鮎川 都連	大久保 蛭子神社氏子	大久保 蛭子神社	
30	1976/10/12	大久保 上組	谷内 八幡神社氏子	谷内 八幡神社	
31	1977/10/11	大久保 桜組	延野 王子神社氏子	延野 王子神社	
32	1982/10/5	平野 光栄団	仁宇 八幡神社氏子	仁宇 八幡神社	
33	1986/11/2	鮎川 都連	丹生谷煙火同好会	延野 王子神社	相生町町制施行三十周年記念

に相生町谷内に花火製造所が完成したのをきっかけとして、伝統ある吹筒煙火を継承・活性化しようという機運が高まり、前出の4市町が協力し、会場持ち回りで年に1度、競技会を定期的に開くことになった。第1回の競技会（第1回相生町吹筒花火競技大会）は、平成9年10月25日、相生公民館グラウンドで行われた。

平成12年度の競技会（第2回相生町吹筒花火競技大会）は、相生公民館グラウンドで10月29日に行われ、相生町・鷺敷町中山・日和佐町赤松から合わせて24の煙火組（相生町9、鷺敷町4、日和佐町11）が参加し、煙火の出来を競い合った（表2）。

表2 第2回相生町吹筒花火競技大会出場者名簿

点火順 番 外	組（連）名	代表者住所	代表者氏名
	相生町吹筒煙火保存会	相生町平野	中田 一男
1	平野新桜組	相生町平野	竹内 稔治
2	龍王組	相生町雄	圓谷 進
3	平野桜組	相生町平野	中田 聡和
4	秋桜連	日和佐町赤松	岡本 浩一
5	昭和組	日和佐町赤松	鈴木 一成
6	中山筒花火紅葉組	鷺敷町中山	清崎萬寿紘
7	鮎川都連	相生町鮎川	殿谷 弘範
8	中山筒花火青年部	鷺敷町中山	下司 義久
9	視繁組	日和佐町赤松	岡本 裕二
10	天酔連	相生町平野	大谷 成和
11	日光連	日和佐町赤松新発地谷	新発 久志
12	赤松日照組	日和佐町赤松日浦	榎谷 安春
13	八幡組	日和佐町赤松	後藤 定則
14	日の出組	日和佐町赤松新発地口	中 由一
15	娯茶平組	相生町牛輪	泉田 良巳
16	煙火愛好会	日和佐町赤松	新開 久勝
17	さざんか連	日和佐町赤松	岡本 育枝
18	八坂組	相生町谷内	龍田 幸
19	牛輪松組	相生町牛輪	湯浅 恵夫
20	中山山桜組	鷺敷町中山	場合喜一郎
21	中山筒花火生友社	鷺敷町中山	千本 蒸二
22	朝日組	日和佐町赤松寺野	メ垣 兼松
23	白鳥組	日和佐町赤松	夏野 清
24	矢筈組	相生町西納野	藤崎喜久男
番 外	相生町吹筒煙火保存会	相生町平野	中田 一男

## 5. 相生町内における煙火グループの二つの構成原理—保存会と煙火組

現在、相生町内には二つのタイプの煙火グループがある。一つは、各地区内の伝統的な煙火組であり、もう一つは地区横断的な保存会である。ここで、それぞれのグループの特徴を対比しながら見てみよう。

「相生町吹筒煙火保存会」には、町内の煙火関係者なら誰でも加入できる。保存会は、伝統的な「煙火組」の枠を超えた、開放的（地区横断的）な組織である。保存会には特定の意匠はなく、秘匿すべき事柄もない。煙火の製造作業も、メンバーが共同で行う。保存会は、煙火組と異なり、競うために煙火を作るのではなく、「相生花火」という地域の伝統文化を継承・発展させるために煙火を作っている。

保存会は、一年を通して町内外のさまざまなイベントに招かれ、煙火を上げている。平成12年度は、町内では8月15日の「相生まつり」、ウィンデック相生（字谷内にある宿泊施設）での各種催事、町外では徳島市で開かれた「全国食文化交流プラザ2000前夜祭」（10月5日）や、「とくしまカウントダウン2001」（12月31日）などのイベントに参加し、花を添えた。

イベントなどでは大量に煙火を打ち上げなければならないこともあるため、機械化を進

め煙火を大量に生産する体制を整えている。結果、個々の煙火の性質も均質化してくる。

一方、保存会とは別に、伝統的な煙火組の活動も脈々と受け継がれている。各煙火組では、秘伝の意匠に基づいた煙火作りが今も行われている。保存会は、吹筒煙火を伝え、広めるために煙火を作るが、煙火組は、競技会で勝つために煙火を作る。吹筒（竹筒）は保存会のものより大きい、とっておきのものを使う。火薬の段数も5～7段と多めである。木炭を自前で焼いたり、鉄粉の粗さを調整するなど、材料への細心のこだわりを見せる。煙火の製造作業は決して他の組には見せない。ここでは、組ごとの煙火の差異が強調される。

今日では社会環境の変化により、全国的に伝統的な民俗文化が消滅の危機に瀕し、多くの地域では保存会を結成することによって辛うじてその命脈を保っている。こうした状況の中で、煙火組の健在ぶり<sup>(3)</sup>は注目に値するが、やはり、競い合う場としての競技会の存在が、煙火組存続の原動力になっているようである。また、思い通りの煙火を作ることの難しさが煙火作りのおもしろさにつながっており、自分たちの理想の煙火を作り上げたいという向上心が、彼らの煙火への情熱を持続させている。

このように、個として技を競い合う煙火組、全体として技を受け継ぐ保存会という二つの組織が互いに支え合いながら、相生の吹筒煙火は今に受け継がれているのである。

## 謝 辞

調査にあたっては、相生町吹筒煙火保存会の中田一男会長をはじめ、各煙火組の関係者の方々にお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

## 注

- (1) 現地では「吹筒煙火」「吹筒花火」の二通りの呼び方がなされているが、本稿では、表記を「吹筒煙火」に統一した。
- (2) 戦前には花の大きい豪快な「男花火」が主流で、きれいなだけの「おなご花火」は審査の対象にもならなかった。粒の粗い鉄を使い、花を咲かせるのが競争だった。しかし戦後鉄粉の規格統一が行われると、花火が「女性化」し、審査の基準も「豪勢」から「きれい」なものへと移っていった。
- (3) 確かに全体的に見れば、煙火組の数、およびその組員数は減少傾向にあるが、近年、新桜組・天酔連・あじさい連など新しい煙火組が結成されていることも注目に値する。あじさい連は、初めての女性だけの煙火組である。

## 参考文献

相生町誌編纂委員会編『相生町誌』相生町、1973年。

相生町老人クラブ連合会編『昔のくらし・相生町』同会、1986年。

徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編『相生の民俗』（民俗文化財集第11集）徳島県郷土文化会館、1990年。